いきる

最終回　薬害の根絶のために

辻川郁子

つじかわ　ふみこ／1929年生まれ。38歳の頃に整腸剤キノホルムによってスモンを発症。薬害スモンの運動に参加し、薬害根絶と患者救済のために活動している。スモンの会全国連絡協議会事務局長

■リュック一つを背負って上京

キノホルム製薬会社や国に対する損害賠償訴訟が各地で起こり、金沢、東京、福岡で立派な原告勝利の判決が出ました。しかし、被告が次々と控訴し、このままでは埒があかないので1978年12月にス全協の大会（東京）で全面解決闘争という方針を出し、運動の拠点を東京に置くことになり、その専従者として私の名前があがりました。でも東京に一人の知人もいないし、西も東もわかりません。

その頃、父はすでに他界し、母と二人で暮らしていましたが、甲状腺ガンで手術を待つ母を一人残しての上京は気がかりでした。

母は、「みなさんのお役に立てることだと決めたら振り向かないで、後のことは心配しないでがんばりなさい」と、かえって励まされました。

事務所も暮らすところも運動する資金もなにもなく、ただ専従を置く、と決めただけの大会にリュック一つを背負って出てきました。せいぜい4ヵ月くらいのはずが、そのまま居つくことになりました。数日は大会会場だったホテルに泊まりながら、部屋を探して、全国のカンパでなんとか事務所ができました。みんな必死で運動をなんとかしないといけないという使命感で走ってきましたね。

■ノーモア・スモン

全面解決闘争の一環で、厚生省（当時）前に座り込む大行動を行いました。製薬会社と国がその責任を認め、スモン被害者の治療と生活を保障するための恒久対策実現と、薬害根絶、被害者救済のための薬事二法の制定などを求めました。

そこで、「こんな苦しみは私たちだけでいい、もう二度と子どもや孫にこんな苦しみを味わわせたくない、ノーモア・スモン」と訴えました。座り込みでは、もちつきをしたり、歌をうたったりなど、座り込みを暗く悲愴な行動だと思っていた人も、楽しく明るくとりくむことができました。この闘争では、各地、各団体の支援者も集まり、スモン被害者の完全救済に協力する国民世論が現れていました。

そうした運動を続けて、1979年9月15日に、製薬会社と国に対して患者の要求の実現を約束させる確認書を調印させました。これによって、製薬会社と国の法的責任を明らかにし、「薬事二法」を成立させ、薬害防止と薬害被害救済の道を開きました。また、損害賠償一時金の他に健康管理手当などの恒久対策を約束させました。

しかし、それで終わったわけではありません。その実現のためには、その後、何度も交渉を重ねる必要がありました。

■いのちの重み

スモン患者の闘いによって、いろいろな仕組みができましたが、これをとりあつかうのはやっぱり人です。スモンの教訓が生かされないで、その後も薬害エイズやC型肝炎などの薬害が続きました。それは、政官財の癒着の構造が問題だと思います。長く闘ってきて問われているのは、やはり人のいのちの重みだと思います。今の安倍政権のやり方は、人のいのちを軽く扱っているように感じます。

今、スモンの闘いの歴史を残そうと動いている人たちがいます。薬害スモンの歴史を後世に伝えて、それがみなさんの目に入り、心に届いて薬害がなくなっていく、人間の尊厳が大切にされる社会に生かされていけば、本当にうれしいです。

▲全面解決闘争の座り込みの様子